

東京湾要塞・観音崎地区における要塞施設分析

日本大学 学生会員 ○小林達也
日本大学 正会員 伊東孝

1. はじめに

東京湾要塞は、東京湾に侵入する敵艦艇を攻撃し、帝都および横須賀軍港を擁護する目的のために建設された。平坦な富津地区、埋立て造成でつくられた海堡、地形をいかした施設類をもつ観音崎地区にわけられる。明治13（1880）年の観音崎第1砲台の着工を皮切りに、数多くの砲台が建設された（表-1）。

しかし現在、土木遺産としてはあまり注目されていないため、その実態はあきらかになっていない。なかでも観音崎地区（図-1）は対岸の富津地区同様、調査・保存がほとんど進んでいない。各砲台跡には現存数の少ないフランス積みの煉瓦を見ることができ、詳細な図面もない。そこで東京湾要塞の観音崎地区に焦点をあて、現地調査から、

1. 観音崎地区の現況状況をあきらかにし
2. 図面分析とあわせて施設の特徴や地形との関係、煉瓦積み等を分析する。



図-1 観音崎地区

表-1 砲台規模と海拔の関係

名称	起工	竣工	備砲	門数	海拔(m)
観音崎第1砲台	M13.6.25	M17.6.25	23口径24cmカノン砲	2	40
観音崎第2砲台	M13.5.26	M17.6.27	26口径24cmカノン砲	6	47
観音崎第3砲台	M15.8	M17.6	28cm榴弾砲	4	63
観音崎第4砲台	M19.1	M20.5	24cm臼砲	4	33
南門砲台	M25.11	M26.8	12cm速射カノン砲 9cm速射カノン砲	4	14
大浦堡壘砲台	M28.5	M29.7	車両式9cmカノン砲	2	55
第1火薬庫	—	—	—	—	12
第2火薬庫	—	—	—	—	12
第3火薬庫	—	—	—	—	12
第4火薬庫	—	—	—	—	10

2. 観音崎地区施設類の現状

今回の分析では、観音崎地区の施設類の中から、『東京湾要塞歴史3巻』の「付録 観音崎施設総括図」（以下、付録図面）にある施設類を、現地調査をおこない、現状を調べた。砲台群のあった跡地は現在、神奈川県立観音崎公園および海上自衛隊観音崎警備所・観音崎青少年の村等に姿を変えている。なお施設類の名称は付録図面のものを用いている。

2-1 観音崎第1砲台

とても良好な状態で2砲座跡が残り、煉瓦は、一部にめずらしいフランス積みが見られている。中央に2つの砲座を隔てる横牆が残る。現在、詳細な図面が残っていないため、測量・作図し、煉瓦・ディテール分析をおこなった。

2-2 観音崎第2砲台

6砲座中4砲座を確認。砲座跡は木や草に覆われ、当時の面影はないが、砲座横に弾薬庫跡とおもわれるフランス積み構造物が残っており、内部の保存状態は良好である。アーチを多用した構成はディテールにも凝っている。観音崎第1砲台と同じく測量・作図ののち分析をおこなった。

2-3 観音崎第3砲台

観音崎公園の「海の見晴し台」となっていて、一部砲台跡も残る。フランス積み構造物も残るが、観音崎第1・第2砲台に比べ損傷が激しい。

2-4 観音崎第4砲台

現在施設跡は、海上自衛隊観音崎警備所内で立ち入り不可。砲台跡の盛土が残ることを敷地外から確認した。

2-5 南門砲台

観音崎公園の「展望園地」となっている。盛土跡と第2次大戦中に構築された15cmカノン砲の円形砲座跡が残る。

2-6 大浦砲台

「戦没船員の碑」として観音崎公園の一部。砲台跡の形跡はほとんど見ることができないが、一部にイギリス積みの煉瓦構造物が残っている。

キーワード 京湾要塞 土木史 軍事土木

連絡先 〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 電話047-469-5572 FAX047-469-2581

2 - 7 第1～3火薬庫*

地域は現在、観音崎青少年の村になっているが、3棟の建物は改修されて宿泊室や集会所として使われている。

3棟とも土台には石が敷き詰められ、その上に煉瓦で高さ57cmのアーチ型のトンネルを備えた基礎部がイギリス積みで築かれている。床下に並ぶトンネルの目的は、おそらく湿気から弾薬を守るため、高床にしたのではないと思われる。（『よこすかの四季』（2001）では兵舎か診療所と推定。）基礎部には黒味がかった煉瓦が使われ、外壁はモルタルで仕上げられているが、すべて煉瓦造の建物である。

2 - 8 第4火薬庫

現在は観音崎公園の駐車場。面影はない。

3. 観音崎地区砲台群の図面分析

明治以来、要地に砲台を建設して要塞としたが、今回分析する地区の施設類をみると、大きく4つのゾーンに分けることができる（図 - 2）。

1つは、要塞の骨格を成す海拔40m以上の高地部に設けられた観音崎第1、観音崎第2、一番高い（63m）観音崎第3の各大型砲台の「主要砲台ゾーン」。2つには、南部海岸線沿いの低地部に設けられた観音崎第4、南門の各砲台の「南岸補助砲台ゾーン」。3つには、大浦砲台を中心とした「背面防備ゾーン」。そして4つめが、観音崎地区の中央の谷間に身を潜めるように設けられた第1～4火薬庫のある「火薬庫ゾーン」である。

付録図面を用いて、各施設群の海拔と備砲の砲種から施設ごとの任務・目的を分析する。

3 - 1 主要砲台ゾーン

高所部につくられた砲台群のうち最高地点（海拔

63m）に設けられたのは、観音崎地区最大の砲・28cm榴弾砲4門を擁する観音崎第3砲台である。第1次世界大戦以前は、好んで高い山頂に榴弾砲砲台を構築した。これは砲弾の落速を増加し、艦艇の甲板を射貫く威力を増大させるためである。

40m前後の高地に配置された観音崎第2砲台は、6門の24cmカノン砲を山の斜面に段々に配置し、観音崎の北東部の地形をうまく利用している。第3海堡と対面し、この間で敵艦の航行を遮断する目的である。地形的に最も陰しく、偽装が容易な砲台となっている。

第2砲台から7mほど低い位置にある観音崎第1砲台も、カノン砲を装備している。

3 - 2 南岸補助砲台ゾーン

南側海岸沿いの低地部に配置されている南門砲台・観音崎第4砲台は補助砲台とよばれ、大口径火砲砲台の補助として敵艦艇の脆弱部を射撃し、あるいは要塞付近に上陸を企図するものを射撃するものである。日本軍は比較的山あいのなだらかなこの海岸線を、仮想上陸地点として砲台を設けたことがわかる。

3 - 3 背面防備ゾーン

大浦砲台は他の砲台と違い、海の方を向いていない。これは背面防御のために他の海岸砲台の背後に位置し、背後に上陸した敵の進行を阻止するための砲台で、明治時代の要塞編成に多く見られるものである。

3 - 4 火薬庫ゾーン

第1～4の各火薬庫は観音崎要塞の中央部に掩護秘匿を十分考慮して構築されている。周りの三方を50m級の山々に囲まれ、飛行機のない明治期、遠方からは確認できないようになっていることがわかる。また交通の便のよい場所を選定している。

4. おわりに

東京湾要塞・観音崎地区の施設は、100年以上前の構造物でありながら、一部を除き現存していることがわかった。

図面分析をおこなったことにより、観音崎砲台群は高低差を生かした施設配置がなされ、各施設はそれぞれ役割を持ちながら、要塞を構成していることがわかった。ここではそれを4つにゾーン分けし、名称付けた。

全国的にも貴重なフランス積み構造物が多数現存していることがわかったが、調査・保存活動は今後とも継続していくべきである。

*『西洋建築見てある記 観音崎の歴史を語るレンガ建築』『よこすかの四季 春季号』2001年



図 - 2 施設配置図